2015年（平成27年）3月1日（日曜日）



発行所 高知新聞社
高知市本町3丁目2-15
088-822-2111〒780-8572

© 高知新聞社 2015

『人の視点 変えるのが仕事』







酒井俊彦さんが手掛けた商品など。右から「四万十ノ」の男鍋セット、日本モーターボート競走会のトロフィー、フジ医療器のマッサージチェア（いずれも酒井さん提供）

プロダクトデザイナー 酒井俊彦さん（高知市出身）に聞く

家電、マッサージチェア、住宅、トロフィー…。東京都港区に事務所を構えるプロダクトデザイナー、酒井俊彦さん（50）＝高知市出身＝は1990年ごろからさまざまな製品のデザインを手掛けてきた。近年は仕事の幅を広げ、企業や地域の商品開発のブランディングも手掛けている。「頭をひねって違う視点からものを見て、人の視点を変えてあげるのが仕事」と話す酒井さんのものづくりの考え方を聞いた。（東京支社・大野泰士）



「ちょっと使い勝手が悪くても、その人が気に入って使ってくれる物を作りたい」と話す酒井さん（東京都港区のサカイデザインアソシエイツ）

プロダクトデザイナーは、依頼者が示した価格帯や機能などの仕様を基に「物」のデザインを考える仕事だ。

「ボートレースのトロフィーなら競走している状態がいいだろうとか、炊飯器ならその会社らしさや機能が表現されているかとか」

酒井さんの手掛けた商品群は、シンプルでこざっぱりとしている。独立して約22年。物にとどまらず、企業などと一緒にブランドを考える仕事の依頼も増えてきた。

例えば、大手化粧品会社の新ブランド立ち上げ。高価格帯の商品が多いこの会社が求めたのは「客が気軽に手に取って、コミュニケーションが取れるブランド」だった。

ディレクターとなった酒井さんは、「架空のユーザー層をつくってもしゃあない」と、会社側スタッフの女性リーダー「山口さん」をターゲットに設定。スタッフとともに、山口さんの自宅のインテリアやアクセサリーなどを細かく観察し、「山口さんが買いたい商品」を突き詰めた。

「企業の商品開発の手法は確立されている。それとは違うものを考えるのは、中の人だけだとなかなかできない」。意外な手法を取ることで、酒井さんはスタッフの〝気付き〟を促し、ポップでかわいらしいパッケージのハンドクリームや入浴剤などが仕上がった。

地域の事業にも携わっている。高岡郡四万十町では、有志から「地元に仕事をつくりたい」との依頼を受け、「都会の視点で切り取った豊かな四万十」をテーマにした地域ブランド「四万十ノ」を提案。みそや日本酒、お取り寄せの鍋セットなどの商品を作り、首都圏の有名デパートやインターネットで販売されるようになった。

多くのものづくりを手掛ける中で、酒井さんは「企業などはユーザーの声というか、身勝手を少し聞き過ぎている」と考えている。背景にあるのは、消費者の声を迅速に取り込もうとする商品開発のスピード感。「デザインがどんどん無味乾燥になっている。もうちょっとゆっくりしたビジネスモデルがあってもいいんじゃないか」と指摘する。

「自分らの納得のいくスピードで、数が少なくて、お待たせするかもしれないけど、愛される。そんなものづくりが爆発的ではないが、長くもうかる気がする。高知の人はちょっとずれているというか、他にない物を作れる可能性があるんじゃないかな」

そんなふうに、酒井さんは本県の県民性やものづくりに可能性を感じている。

さかい・としひこ　64年高知市生まれ。土佐高、東京造形大卒。88年に都内のデザインスタジオに入社し、92年に「サカイデザインアソシエイツ」設立。グッドデザイン賞やレッドドット・デザイン賞など受賞多数。東京造形大、法政大非常勤講師、県観光特使も務める。